

# 2012 年度大会テーマ投稿論文

## 大会テーマ

### 「希望としてのソーシャルワーク —3・11以後の社会福祉を問う—」

## 希望・生きる意欲を育むソーシャルインクルージョン

—賀川豊彦「死線を越えて」・小林多喜二「蟹工船」にみる“概念崩し”を通して—

院前期2009年卒 末道大作

### I. 研究の目的・方法

自殺者数が年3万人を超えており<sup>1</sup>、ジニ係数は上昇傾向にある<sup>2</sup>。主観的ではあるが、マスメディアによって取り上げられる内容は、人災や自然災害あるいは政治への不信、低迷する経済成長、海外における内乱・暴動という、希望・生きる意欲を失わせるものばかりに感じられる。

そこで、本稿では、格差社会をキーワードとしてブームとなった小林多喜二「蟹工船」、総発行部数400万部と推定（賀川豊彦，2009，p3）されている賀川豊彦「死線を越えて」、に注目をして、人びとに希望・生きる意欲を与えるものが何であるのかを考察していきたい。2冊に注目するのは、格差社会・貧困をキーワードとして社会背景に少なからずの類似点を見るからである<sup>3</sup>。さらに、関東大震災において神戸から東京へかけつけた賀川豊彦の行動に東日本大震災に対する対応のあり方を考えさせられるからである。そして、2冊の本は、文学の中に政治を持ち込み、人びとが漠然と疑問に感じている格差・貧困に対して、その原因だけではなく、ソーシャルワーク的な解決

方法を示したと思われるからである。その過程は、①当然のことにように受け入れてきた現状に明確な疑問をもたせ（概念崩し）、②自省やあらたな概念枠組みを創り出すプロセスを埋め込み（リフレクション・リフレーミング）、③新しい概念を形成させる、ものであるという仮説を立てる。2冊の本を考察していくことで、この仮説を立証しつつ、希望・生きる意欲を育むものが何であるのか考察していくことを本稿の目的とする。

### II. 研究方法及び倫理的配慮

参考文献をもとに、2冊の本に書かれた内容を考察する。倫理的配慮として、研究資料は、公表されているものを用いており、それらの引用については引用先を記している。

### III. 研究結果

#### 1. 概念崩しへのアプローチ

1) 「死線を越えて」にみられる主人公の抱く心の葛藤

主人公は、物語の中で多くの葛藤を感じている。

1 警察庁（2012）「平成23年中における自殺の状況」によれば、平成10年より毎年3万人を超えている。

2 統計局（2011）「平成21年全国消費実態調査 各種係数及び所得分布に関する結果」によれば、1984年より上昇し続けている。

3 賀川豊彦「死線を越えて」は、1920年に改造社より出版された。小林多喜二「蟹工船」は1929年に『戦旗』に発表された。

それは、①学友のみじめな状況、②父との関係、③妹の生活、④スラムでの人びととのやりとり、⑤名士の没落、等々である。それらによって、これまでに抱いていた常識を変えさせられたり、疑問を増幅させたり生みだしたり、あるいは不確かなものに確信を持たせることとなっている。本稿では、このような出来事・経験によるモノの見方の変化を“概念崩し”と表現する。概念崩しの過程で、主人公は何度も自殺を考えていた。一方で、概念崩しは、主人公がスラム街でソーシャルワークを展開する理由も説明している。概念崩しがあれば、主人公は生きる意欲・希望をもってスラム街でソーシャルワークを展開することがなかったといえる。

## 2) 「蟹工船」にみられる労働者の過酷な労働・低賃金

労働者は、蟹工船へ乗ることを「地獄」へ行くことと表現している。その比喩にふさわしいと思われる労働環境が描かれている。この時点では、概念崩しは大きくなっていない。そこに、社会主義の考え方、資本家との格差の存在、現場監督者の乱暴な言動、仲間の死、公権力と資本家との結びつき、が描かれることによって、労働者のなかに概念崩しが生じた。この概念崩しによって、労働者が、団結によって状況を変えようとする希望をもち、生きる意欲を持つこととなる。概念崩しによって、希望・生きる意欲の生みだされる場合があり、人びとに大きな影響を与える可能性もあるといえる<sup>4</sup>。

## 2. 新しい概念を形成するためのリフレクシオン・リフレーミング

主人公・労働者は、概念崩しによって、自らを省みている（リフレクシオン）。また、その過程を示すことで、読者へも同様の作用を促している。2冊は、当時の社会背景を問題視して、格差拡大や貧困・差別などを解決するために人びとの行動

を促している。社会の中で他者との関わりで展開する2冊は、社会的な理論による考察の努力を読者に求めている。そこでは、様々な機能が入り混じっている複雑な社会と、心理的・身体的・社会的に複雑な人間とを分析する枠組みが必要である。その複雑な状態をもっともよく整理するものとしてリフレクシオンを用いている。つまり、リフレクシオンが生じるということは、“既に”その複雑さの一部が経験されていることを意味している。さらに、その経験が“単なる繰り返し”ではなく、意味のあるものとして浮上しているからこそ、個々人の“概念崩し”を促す。このリフレクシオンの過程で、希望や生きる意欲を喚起する新しい概念が生成され、社会や人間の複雑さが、例えば2冊の例であれば「博愛主義」や「労働組合」というキーワードにおいて整理されると考える。

また、リフレクシオンを引き起こすのは、学び等により得られた経験とそれまでの自己が培ってきたものとの間に、何らかの作用（共鳴・葛藤等）が生じていることによる。すなわち、唯一の真実として下される、固定された価値観や独善的な判断を、改善していく機能を発揮される可能性を生じさせる。ネガティブに捉えがちな「批判」も、ここに来て「参加」として積極的に取り扱われる。さまざまな部分で比較の可能性が開かれる。これは、2冊の本でみられた概念崩しのプロセスといえる。概念が崩されることで、新しい概念を生みだそうとする。それが、希望・生きる意欲を生み出す原動力の一つとなると考える。

さらに、「共通の経験」の積み重ねによるリフレクシオンは、自己が社会に包摂されていく過程と成り得る。2冊の本にみられた、労働者の団結や貧困者の協力は、各人に類似したリフレミング等が起こることによる。社会的排除が問題視される昨今、「共通の経験」によるリフレクシオンの意義は高いといえる。

加えて、リフレミングによってストレスを解消し行動様式を変えていくことは、その仮想現実

4 「蟹工船」は、発禁処分となっている。（日本書籍出版協会（1968）「日本出版百年史年表」p436.）

においてなされることがある。現実と理想の差を意識することとなる。2冊の本は、貧困者の現状について考えさせたり、労働者の過酷な現状と資本家の裕福な生活との差を意識させている。その結果、理想がどうあるべきかを考えさせ、生きるヒントを与えている。それは、概念崩しによる成果ともいえる。

### 3. 新しい概念形成による効果について

2冊の執筆された歴史背景には、戦争や日本資本主義がある。それらが格差を拡大させているのではないかという問題意識を持っている。そこで、新しい概念として、「反戦争」や「反資本主義」といったメッセージが込められている。新しい概念が人びとに受け入れられて、希望・生きる意欲へとつながるには、現状に対する不満があり、それらの解決方法が示されているからだと考える。2冊の本では、主人公や労働者の経験が、新しい概念を受け入れさせる説得力となっている。「貧困」を個人の問題としてではなく、社会の問題として概念化している。その結果、働いても経済的貧困である原因を伝えている。さらに、資本家とスラムの住人・労働者の間にある階級格差を意識させた。

ソーシャルキャピタルの問題として、貧困や劣悪な労働環境を考えるなら、2冊の本では、スラム内や蟹工船内での活動に留まりがちなため広がり限界がみえてとれるものの、その広がり可能性を示唆している。エンパワメントによるマイノリティの行動だけではなく、それがマジョリティとして広がるようなソーシャルサポートネットワークの構築も示唆している。

また、貧困の発生原因（人間の欲）や貧困の持つ意味（基準）などを考えさせる機会ともなっている。2冊によって行われた概念崩しは、社会背景を考えさせ、問題解決の方法を示している。そして、希望・生きる意欲を人びとに与えている。これらの効果は、教育による効果とも重なっていると考える。

## IV. まとめ—残された3つの課題—

### 1. 福祉教育実践の序章としての概念崩し

読書を通して“概念崩し”を行うのは、人びとの意識へ訴えかける手段としての教育（福祉教育）の効果をも考えさせる。机上において学習を深めるだけではなく、家庭や地域社会における意識の葛藤を取り上げることで日常生活そのもののなかで差別や貧困に対する偏見を払しょくしようとする態度の形成を目指したといえる。教育機能による自分自身の問題として考える社会問題の相対化は、概念崩しによる新たな概念の形成によって生じる希望・生きる意欲の喚起といえないか。このように考えると、個人と社会に着目するソーシャルワークが取り組む課題の一つが概念崩しによる新しい概念の形成となる。具体的には、ソーシャルワークは、個人に対して、価値観の変化・涵養による責務の生成、社会との境界線の意識化・設定、社会的営みのあり方の設定、などを要求しつつ、人生への希望・生きる意欲を形成していくものとなる。貧困に対する抵抗力の育成や、自分自身を社会関係とのあいだで相対的に評価する視点の育成、の効果があるといえる。このような効果は、教育の初期の段階で行われることで、その後の教育効果を高めると考える。よって、福祉教育実践における序章として概念崩しが存在するという仮説を立てることができる。

### 2. ソーシャルインクルージョンに必要とされる概念崩し

2冊の本では、活動の場を同じとしつつ、多様な人びとがつながり協力していく過程が描かれている。そこでは、多様な人びとが個々に持つ多様な概念の一部が崩されて、共通の目標による新しい概念が生みだされた。それは、共通の目標を持ちつつも、「スラムの子どもたちと大人」や「若い労働者と高齢な労働者」の世代間交流等も手伝って、多様性を担保している。多様性を尊重しつつ、共に生きるという意識をスラムの住人や蟹工船の労働者に持たせることとなった。つまり、概念崩しがソーシャルインクルージョンへつな

がったといえる。概念崩しによって、どのような概念が創造されるかが重要な問題ではあるが、これについては今後の課題とする。そこでは、自省の繰り返しによる多重なフィードバックが行われながら、つまり概念が変化しながら、答えが導き出されると考える。少なくとも2冊は、社会保障制度の枠からでた人、雇用関係から排除された人、アンダークラスの人びと、という社会的排除を取り扱い、その解決としてのソーシャルインクルージョンを示したといえる。

### 3. 自分に対する責任と社会に対する責任について

2冊は、登場人物の自己犠牲の上に成り立っている部分が少なからずある。責任を、“内向きの責任（自分を大切にする）”と“外向きの責任（周囲を大切にしてお返しを果たす）”に分けるなら、2冊の本は、“外向きの責任”を果たそうと努めたといえる。しかし、結果として、小説の世界だけではなく、現実の世界においても「蟹工船」の著者は、特高警察に捕まり拷問の末、息を引き取った（ノーマ・フィールド,2009,p239）。この自己犠

牲の結果についてどう解釈するか。内向きの責任についても考えていかなければならないのではないかな。

#### 主な引用・参考文献

- 隅谷三喜男 (2011)「賀川豊彦」岩波現代文庫  
賀川豊彦 (2009)「復刻版死線を越えて」PHP研究所  
ノーマ・フィールド (2009)「小林多喜二」岩波新書  
岩田正美 (2007)「現代の貧困—ワーキングプア／ホームレス／生活保護—」ちくま新書  
Paul Spicker (2007) ,The Idea of Poverty,Policy Press (= 坪洋一監訳 (2008)「貧困の概念」生活書院)  
岡田敬司 (2004)「自律の復権—教育的かかわりと自律を育む共同体」ミネルヴァ書房  
Niklas Luhmann (2002) Das Erziehungssystem der Gesellschaft (=2004、村上淳一訳『社会の教育システム』東京大学出版会)  
小林多喜二 (1953)「蟹工船・党生活者」新潮文庫